

加藤周一著作集



14 加藤周一著作集
羊の歌

加藤周一 編集

平凡社

加藤周一著作集14 (全15卷)

羊の歌

一九七九年九月二〇日 初版第一刷発行

著者 加藤周一 かとうしゅういち

装幀 池田満寿夫

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

〒一〇二 東京都千代田区四番町四

電話 〇三(二六五)〇四五一

振替 東京八二九六三九

印刷 明和印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

定価 一八〇〇円

© 加藤周一 1979

Printed in Japan.

製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい(送料小社負担)。

目

次

羊の歌

祖父の家

5

土の香り

16

渋谷金王町

29

病身

40

桜横町

52

優等生

63

空白五年

73

美竹町の家

83

反抗の兆

95

二・二六事件

106

駒場

117

戯画

127

高原牧歌

138

縮図

149

古きよき日の想い出	161
ある晴れた日に	169
仏文研究室	179
青春	188
内科教室	200
八月一五日	211
続羊の歌	223
信条	225
広島	235
一九四六年	246
京都の庭	257
第二の出發	267
詩人の家	278
南仏	290

『羊の歌』あとがき	439
審議未了	427
死別	416
AA作家会議	405
格物致知	395
外からみた日本	384
別れ	374
偽善	363
海峡の彼方	351
音楽	342
冬の旅	331
二人の女	319
故国の便り	309
中世	300

初出
一覧

あとがき

446 441

加藤周一著作集

羊の歌

14

羊
の
歌

祖父の家

前世紀の末に、佐賀の資産家のひとり息子が、明治政府の陸軍の騎兵将校になった。日清戦争に従軍するまえに、家産を投じて、馬二頭と馬丁を貯え、また名妓万龍をあげて新橋に豪遊し、イタリアに遊学しては、ミラノのスカラ座にカルーソーがヴェルディやプッチーニを唱うのを聞いた。それが私の祖父である。祖父はそのとき西洋流の美衣美食と男女交際の慣習を、いくらか身につけてきたらしい。日露戦争の頃には、陸軍大佐となり、帝国陸軍のために軍馬を調達する目的で濠州へ行つた。戦後陸軍を退いてからは、貿易仲買の事業をはじめて、第一次世界大戦中にもうけ、その後の恐慌で資産の大部分を失つたから、晩年の生活はあまり豊かではなかつた。

早くから佐賀県令の妾腹の娘と結婚していて、一男三女があつた。長男は帝国大学医学部を卒業して間もなく死んだ。三人の娘のなかで、長女は学習院へ通わせ、後に佐賀の資産家の長男で政友会の代議士に嫁した。次女と末の娘は、雙葉高等女学校へ通わせて、洗礼までうけさせたが、それぞれ基督教徒ではない夫に嫁した。次女の夫、つまり私の父は、埼玉県の大地主の次男で、医者。末の娘の夫は、大阪の町家の出で、会社員であつた。家産の傾きはじめると共に、娘の結婚の相手方の資産の程度も、次第に小さくなつたのである。代議士は、民政党内閣のときには、

「浪人」をして、子分たちと自宅で酒を飲んでいたようだが、政友会が政権をとると、県知事になり、俄に羽振りがよくなった。しかしそれ以上の権勢を得ないうちに、選挙の応援演説に行つて卒中に倒れた。医者は開業をしたが、成功をもとめず、したがって成功もせず、ひっそりと渋谷で暮らしていた。会社員は大いに出世を望んで、大阪で奔走していたが、その望みを果さぬうちに、肺結核で死んだ。この三人の娘輩たちは、没落の過程にあつた祖父の家を、たてなおすための役にはたたなかつたようである。

第一次大戦の直後、一九一〇年代のおわりに嫁した三人の娘には、それぞれ孫ができていた。長女にはひとりの息子があり、後に外交官になった。次女には一男一女があり、それが私と私の妹である。末の娘にも一男一女があり、後にそれぞれ大学教授と会社員になった。

子供の私の記憶は、関東大震災のまえにはさかのぼらない。私の覚えている祖父の家は、おそらく二〇年代の後半のことであろう、渋谷駅から青山七丁目へ向つて宮益坂をあがり、坂の中頃の左手にあつた。宮益坂の歩道から少し退つて、御影石の柱と左右に開く鉄の扉を備えた門があり、門から両側に植込みのある砂利道がしばらく真直につづいていて、その奥に玄関がある。玄関といくつかの「洋間」は、明治大正の日本に多い英国のヴィクトリア朝様式をまねたつくりで、天井が高く、窓がせまく、重い革の肘掛椅子がおいてあつた。壁にかけた鹿の角、虎の革の敷物、古風な切子硝子の行燈、エジプトのらくだの刺繡、パリの卓子掛——額縁に入れたいくつもの馬の写真が祖父の経歴を示していたことを除けば、要するにどの旅行者でも西洋からもつて帰りそ

うな品物が、古道具屋の店頭のようにならべられていたといつてよいだろう。そういう部屋に格別の用途はなかったらしい。祖父は祖母と書生と三人の女中と共に、その「洋間」の奥につづいた沢山の和室のいくつかを使って暮らしたのである。

子供の私には、祖父の家でおこっていることのすべてが、不思議な宗教的儀式のように思われた。居間の大きな机のまえに坐った祖父が、あごで指図をすると、祖母や二人の女中が——もうひとりの台所にいる女中と書生が居間に姿をみせることは、ほとんどなかった——煙草やお茶や状差しを、うてば響くようにさし出す。食事の皿はむやみに沢山あり、それは必ずしもすべてを食べるためのものではなく、しばしば箸をつけただけで祖父が傍へ押しやるためのものであった。「こんなものが食えるか」というと、皿を庭へ投げることもあったらしい。しかし私はいつも母について行ったので、そういう光景をみたことはなかった。私の母のいるところで、祖父はいつも機嫌がよかったし、たとえ不機嫌なことがあっても、それを露にすることを控えていたようである。私はひとりの主人公の周りで、三人の女たち、祖母と二人の女中が怯えたように絶えず気を配っているのを眺め、それほど近より難い威力を備えた主人公と談笑することのできる母にも、また無限の能力をみとめていた。たとえその能力の性質は、子供の私にはよくわかっていなかったとしても。

祖父が何かの用事で出かけようとするときに、その不思議な儀式は頂点に達した。起ちあがった祖父の大柄な身体に、小柄な祖母がより添って、二人の女中が、次々にさし出す下着や洋服を

着せかける、折りたたんだ白い麻の手巾を胸にさし、大きな鏡をみながら、薄い髪をなおし、舶来の香水を、大きな瓶の頭についた金具から吹きかける。母がその様子をみながら、「お父様もおたのしみでしょう」などといい、祖父が香水をかける手を休めずに、冗談でそれに答えている間、祖母は女中を指図して、「お靴はそろいましたか、今日はそれではありませんよ、早くとりかえて……」などと大きわざをしていた。なぜひとりの男が家から出かけるために、これほど多くの人が右往左往しなければいけないのか、そのときの私には全くわからなかった。祖父は玄關で靴をはかずに、庭に面した縁側の踏石の上で靴をはく。そこからはすぐに庭へ降りることができ、庭の片隅に祀られた稲荷のまえに行つて、柏手をうつのは、その儀式のどうしても必要な一部だったからである。二人の娘をカトリックの女学校へ送つた祖父は、神主をよんで冠婚葬祭を行つていた。しかし何かを信仰してたとすれば、自宅の庭の稲荷をいちばん信仰していたのかもしれない。

稲荷は少し低くなつた木蔭にあつて、家の縁側からはみえなかつたが、植込みの間の石段を辿つて行くと、小さな朱塗りの鳥居があり、人の肩ほどに築かれた石の台の上に、その祠があつて、左右に石造の狐を配していた。大工の藝の手のこんだ細工であつたと思う。手入れはいつも行きとどいていて、供物があつた。家族のなかで、祖父のほかには稲荷を信仰している者は、ひとりもいなかったが、誰もが、徹底した無神論者であつた私の父でさえも、また子供の私でさえも、祖父が稲荷について真剣であるらしい、ということを知つていた。晩年の祖父は毎朝そして外出

の度に、そこで商売の成りゆきや、家族の安泰や、またおそらくは愛していた女たちの身の上を祈っていたのである。

祖父には女友だちが多かった。そのなかのひとりには、西洋人で、私たちがいるときにも、祖父が電話に起って、フランス語でその婦人と話すようなこともあった。家族のなかにフランス語を解する者はいなかったから、それが商売の電話であるなどと、いつくろつていたらしい。しかし私の母は、そういうことをすべて見抜いていて、「いくらおばあさんにわからないからといって、眼のまえて話をするのは、ひどいわ」といつていた。しかし母はその「おばあさん」にも批判をもっていなかったわけではない。「おばあさん」が眼のまえて別の女と話をされても、なんのことかわからないのは、言葉のためばかりではなく、そもそも知りたくないからなのだ、と母はいつたことがある。「女遊びは男の働きである」と「おばあさん」は考えているのであり、それは、彼女が「やはり妾の子だ」ということに関係があり、しかし自分のみているところでの電話についてはそれが商売の電話だと考えていたかった、というのである。私は祖父の相手の西洋の婦人に会ったことはない。しかし女友だちのひとりには会ったことがある。

その頃西銀座に祖父は小さなイタリア料理店を経営していた。一階に酒場があり、そこからせまい急な階段をのぼると、二階で食事ができるようになっていた。祖父は孫を連れてその店へ食事に行くことがあった。「今日は家族連れだ」などといいながら、酒場の奥へ声をかけ、顔見知りの男たちと軽口を叩き合う。それはイタリア語かフランス語のやりとりで、抑揚が表情に富み、